

## 人形の墓

萬右衛門はその女の子をすかして内に入れて、喰べさせた。賢い、氣の毒な程おとなしい、十ばかりの子供に見えた。名は稻であつた、そしてその弱々しくほつそりして居るのがその名をふさはしく思はせた。

萬右衛門の穏やかな勧めによつて彼女が話を始める時、私は彼女の聲がその話につれて變つて來た事から何か風變りな話があると豫想した。彼女は全く一樣な高い細い可愛い聲で話し出した、炭の火の上で小さい鐵瓶が吟じて居ると同じ様に變化のない、感情の現れない聲であつた。日本では人は屢々こんな落着いた平板なそしてよく透る聲で、決してありふれた事でない何か感ずべき或は殘酷な或は恐るべき話を、女や女の子が話すのをきく事がある。その實、いつでも感情は抑制されて居るのである。

『うちには六人ゐました』稻は云つた『母さんと父さんと、大へん年とつた父さんの母さんと兄さんと私とそれから妹と。父さんは表具屋でした、ふすまを張つたり又かけものの表装をしたり致しました。母さんは髮結でした。兄さんは版木屋に年季奉公に行つてゐました。』

『父さんも母さんも景氣がよかつたのです。母さんの方が父さんよりもつとお金をまうけまし

た。私共はよい着物を着てよい物を食べてみました、そして父さんが病氣になるまで私共には本當の心配といふ物はありませんでした。

『暑い季節の真中でした。父さんはいつも達者でした。私共は父さんの病氣はさう悪いとは思ひませんでしたが、そして父さんもさう思ひませんでした。しかし丁度その翌日死にました。大へん驚きました。母さんは胸の中をかくして前の通りお客の前に出るやうにしてみました。しかし母さんは丈夫ではありませんでした、そして父さんのなくなつたと云ふ心配が餘り急に参りました。父さんの葬式のあと八日たつて母さんが又なくなりました。餘り不意だったので驚かない者はありませんでした。それから近所の人達は直ぐに人形の墓を造らないではいけない、造らないと又私共のうちでもう一人死ぬだらうと申しました。兄さんはその話は本當だと云ひましたが、云はれた通りにする事は延しました。私に分らないけれども多分金がそれ程なかつたからでせう、とにかく墓はできませんでした』……

## 集 靈 八 泉 小

『何ですか、人形の墓とは』私は遮つた。

萬右衛門は答へた『多分あなたは人形の墓を澤山御覽になつてゐてお氣がつかなかつたのでせう、丁度見たところ子供の墓のやうです。一家のうちで同じ年に二人死んだら三人目に死ぬ人が必ずあると信じられてゐます。「いつでも墓は三つ」と云ふ諺があります。ですから一家内で同年に二人の葬式があつたらその二人の墓のつぎに第三番目の墓を造ります、そしてそのうちへは

んの小さい藁人形のある棺を入れます、そして墓の上に戒名を書いた小さい墓石を建てます。その墓地をもつて居るお寺の僧侶はこんな小さい墓石に戒名を書いてくれます。人形の墓をたてると死なないやうになると考へられてゐます……稻、話のあとをきかしておくれ』

子供はつづけた、『未だおばあさんに兄さんと私と妹と四人ゐました。兄さんは十九でした。父さんがなくなつた丁度前に年季奉公を終つたところでした、これも私共を神様が憐んで下さるやうだと思ひました。兄さんは家の主人となつてゐました。仕事が大へん上手で、澤山同情して下さる方がありましたから私共を養つてくれる事ができました。初めの月に十三圓まうけました、版屋としてはそれは中々いゝのです。或晩病氣して歸りました、頭が痛いと申しました、丁度その時母の四十七日になつてゐました。その晩兄さんは食べる事ができませんでした。翌朝も起きられません、——大へん高い熱がありました、私共は一所懸命看護して夜ねないでわきにゐました、しかしよくなりませんでした。病氣になつてから三日目の朝私共は驚きました、兄さんが母さんに話をし始めたからです。母さんがなくなつてから四十九日でした、四十九日に魂が屋根を離れます、そして兄さんは丁度母さんが呼んで居るやうに物を云ふのでした「はいはい、母さん、ちぎに参ります」それから兄さんは母さんが袖を引つばつて居ると申しました。指をさして私共に「あれ、あすこに居る、あすこに、見えないか」と申します。私共は何にも見えないと申します。さうすると「あゝ、早く見なかつたからだ、母さんは今かくれて居る、今疊の下へは

ひつた」と申します。午前中こんな風な事を云ひました。仕舞におばあさんは立ち上つて、床の上で足をふみならして大きな聲で母さんを叱りました。「たか」おばあさんは申しました「たか、お前は大へん間違つた事をして居る。お前の生きて居る時は私共は皆お前を大事にした。お前に邪見な事を云つた者は一人もない。今どうしてあの倅をつれて行かうとするのか。あれはうちの大黒柱である事はお前も知つて居るだらう。あゝ、たか、これはひどい、これは恥知らずだ、これは無茶だ」おばあさんは大へんに怒つてからだがふるへました、それから坐つて泣きました、そして私と妹が泣きました。しかし兄さんはやはり母さんが袖を引つぽると云ひました。日の沈む頃、なくなりました。

『おばあさんは泣いて、私共をなでて、自分で作つた歌を歌ひました。今でも覚えてゐます、――

親のない子と濱邊の千鳥

日ぐれ日ぐれに袖ぬらす

『そこで第三の墓ができましたが、人形の墓ではありませんでした、そしてそれが私共のうちのお仕舞でした。私共は冬になるまで親類にゐましたが、その時おばあさんがなくなりました。おばあさんは夜誰も知らないうちになくなりました。朝眠つて居るやうでしたが、なくなつてゐたのです。それから私と妹は分れました。妹は父さんのお友達のお友達の疊屋の養女になりました。大事にされてゐます、學校へも参ります』

『あ、不思議な事だ、困つたね』と萬右衛門はつぶやいた。それから暫らくの間同情の沈黙があつた。稲はお辭儀をして、歸らうとして立ち上つた。草履の鼻緒に足を入れた時、私は老人に質問をしようと思つて、彼女の坐つてゐた場所へ動いて行つた。彼女は私の意向を認めて直ちに萬右衛門に何か不思議の合圖をした。萬右衛門は丁度私が彼女の側に坐らうとしたのを止めて、その合圖に答へた。

彼は云つた『稲は旦那様に先づその疊をおたき下さいと願つてゐます』

『しかし、何故』と私は驚いて問うた、ただその子供の坐つてゐた場所が心地よく暖まつて居る事だけを、靴をはかない足に感じた。

萬右衛門は答へた、

『外の人のからだで暖かくなつた場所に坐ると、その人の不幸を皆取る事になるから、初めにその場所をたたかないといけませんとこの子は信じて居るのです』

そこで私はその『まじなひ』をしないで坐つた、そして私共二人は笑つた。

『稲』萬右衛門は云つた『旦那様はお前の不幸を御自分にお取りになります。旦那様は』(私は萬右衛門の使つた敬語を譯する事はとてもできない)『外の人の苦しみがお分りになりたいと思つておいでです。お前は心配をしなくてもいゝよ、稲』

(田部隆次譯)

*Wing-wo-Haku, (Gleaning in Buddha-Field.)*